

2 社 会 科

柏木俊明・佐藤 健・須本良夫

1 社会科における自立の必要性

国際化、情報化、高齢化、地球環境の悪化等、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化しており、今後もさらなる加速化が予測される。子どもたちにとって、これらの社会の変化が自分たちの生活にどんな意味をもたらすのか、自分とのかかわりの中で社会を見つめ、自分自身の生き方に思いを巡らせながら、自己を確立していく学習が不可欠である。

子どもたち一人ひとりの生活と結びついた学習の充実を図り、「社会を形成する一員として、自ら考え判断し、行動して、自分たちの生活をより豊かにすることのできる力」を育むことが必要である。子ども一人ひとりが、学習の仕方を習得しながら、自分なりの問題意識と見通しをもち、問題を解決しようとする意欲や態度の育成を重視していきたい。

2 社会科における自立と人やものとのかかわり

(1) 自立と人やものとのかかわり

社会科部では、自立を、「社会的事象について、自分でめあてを決め、それを追究し、その結果を自ら振り返り、新たなめあてをつくることで、よりよく生きていこうとすること」と捉えた。

このような自立する姿に向かっていくためには、「人やものとのかかわり」が不可欠である。自立とは依存との相互関係であり、自分自身を見つめ深めていくためには、他者（人やもの）とのかかわり、他者から学ぶことが求められるからである。社会科においては、社会的事象との出会いの場、追究過程やふりかえりの場など学習の様々な場面で、人やものとかかわることが求められる。

(2) 社会科学習における人やものとのかかわり

社会科学習における人やものとのかかわりは、主に次の2つが考えられる。

1つ目は、「学びの対象としての人やものとのかかわり」である。社会科における学びの対象は、人やものそのものである。それを整理すると、次のように分類できる。

人	個人（固有名詞）、集団（地域のサークル等）、組織（幕府、国際連合等）
もの	物（道具や遺産等）、出来事（社会の出来事）、文化（地域や歴史的な文化等）

社会的事象は、人（組織体を含む）の織りなす行為の過程であり、その結果である。従って、学びの対象である人やものとのかかわり方の度合いによって、学習課題や追究の深まり方が異なってくる。社会認識や市民的資質を深めていく上で、学びの対象である人やものとかかわりあっていくことは、不可欠である。

2つ目は、「学び合いにおける人とのかかわり」である。社会科学習のねらいは、「科学的な社会認識を形成し、市民的資質を育成する」ことである。子どもたちは社会的事象に対して課題をもち、その課題を解決するために社会認識や社会的判断を行おうとしている。しかし、子どもたち一人ひとりの社会認識や社会的判断は、時として十分深まっていなかったり、一面的な判断であったりする場合もある。集団での学び合いを通すことで、児童一人ひとりの社会認識や社会的判断の幅を広げたり深めたりすることが可能になってくる。このことは、社会の一員としてよりよい社会を形成していくうえで必要であるとともに、結果的に、個の学びを深化させることにつながると考える。

3 めざす子ども像

以上の考えに基づき、「めざす子ども像」を大きく以下のように設定する。

- ◎ 学び合いを通して、自分を高めようとする子ども
- ◎ 社会的事象について、積極的にかかわろうとする子ども

具体的には、学習過程にあわせた次のような子ども像を設定する。

- ア. 問題を焦点化することができる子ども
- イ. 問題解決の見通しをもつことができる子ども
- ウ. 問題を科学的に追究することができる子ども
合理的に意思決定することができる子ども
- エ. 学習成果を工夫してまとめたり発信したりすることができる子ども
- オ. 学習したことを次へつなげたり、実生活に生かしたりすることができる子ども

4 「自立に向かう子ども」を育成するための方策

社会科部のテーマに迫るために、次の4点からのアプローチを大切にしていきたい。

(1) 教材構成

「人やもの」に焦点をあてた場合、次のような教材を開発したい。

- 人やものの働きやその社会的意味が子どもにとって具体的に捉えやすいもの
 - 繰り返し問いかけることで、内容の広がりや深まりが期待できるもの
 - 子どもの興味・関心が喚起されやすいもの
- また、取り上げる社会的事象としては、次のようなものを想定している。
- 社会的論争問題を内包し、価値判断を促すような内容の広がりのある素材
 - 環境問題、国際化、情報化など社会の変化に対応した新しい内容を含む素材
 - 過去・現在から学び、自分たちの将来を見据えることのできる素材

(2) 学習過程

自分なりの問題を見つける、計画を立てる、自分なりの考えをもつ、自分なりにまとめるといった子どもたちの主体的な学習の保障という視点から、「めあて追究」の学習を大切にしていく。「めあて追究」の学習は次のようなステップを基本とする。

- ア. 社会的事象に出会い、自分なりの問題を見つける。
- イ. めあて追究の計画を立てる。
- ウ. めあて追究の計画に沿って個人や集団で追究や吟味をする。
- エ. 追究結果を自分なりの方法で表現し、お互いに学び合う。
- オ. 自分の追究結果を振り返り、自らの考えの変容や追究のよさに気づくとともに、新たなめあてを見つける。

(3) 学習活動

実体験や追体験等、具体的で多様な次のような学習活動を意図的に組み込んでいく。

- 問題を発見したり、吟味したりするための話し合いや表現など学び合いの場の重視
- 子どもたちが実感できるような体験や調査活動の重視
- 社会参加等、学習したことを生かすことのできる実践的な活動の重視

(4) 学習の評価と支援

学習を展開していく際、子どもたち一人ひとりが何に関心をもったり困ったりしているのかを十分に把握しておく必要がある。子どもたちの学習状況を看取り、子ども個々の状況に応じた支援を行っていく。評価にあたっては、観点別学習状況評価規準を設定し、単元展開の中で焦点化を図りながら、適時評価を行っていく。

特に、人やものとのかかわりを重視する点から、児童が相互に学び合い、ねらいに向かって深め合っているか、また、学習の対象である人や事象とどうかかわり、学びを深めているかを看取っていく。

5 成果と課題

(1) 教材構成

学習対象「人やもの」を中心にした教材化を次のように試みてみた。

- (例) 中学年 「広島の新シキゴイ」(養鯉業者や外国の文化)
「59円バーガー」(ハンバーガー店と価格破壊)
「原爆ドームと被爆建造物」(被爆建造物と平和の希求)
- 5 年 「中国山地の人々のくらしとクマ」(人々のくらしとクマ)
「携帯電話」(携帯電話の使用と情報)
「新聞記事の掲載」(新聞記事掲載と読者)
- 6 年 「中国山地の人々のくらしとイノシシ」(人々のくらしとイノシシ)
「わたしたちのくらしと議会」(人々の願いと議会)
「戦後と東京オリンピック」(東京オリンピックとくらしの変化)

こうした教材化を通して、次の点が明確化しつつある。

- ・ 人に焦点をあてると、直接人とかかわることができ、表情が見えるとともに思いや考えが直接伝わる。また、固有名詞で人と子どもの繋がりをつくることができる。
- ・ 目的をもって、見学し実物に出会うことは、資料などの間接的なものより分かりやすく、学習を深めることができる。
- ・ 教材のもつ「人やもの」の対象を整理することで、子どもとのかかわりの中で特に重要な対象を浮き彫りにすることができた。
- ・ 実物とのかかわりの中で、課題追究の意欲が湧き、内容を深めることができた。
- ・ 本校では校区が広いため、地域の共通した文化とかかわることが難しく、子どもの共通の意識になりにくい。

(2) 学習過程

- ・ 学習過程を複線化し、子どもの個々の意欲を大切にすることで、学習を深めることができた。
- ・ 同じ学習形態を経験することで、めあて追究など、見通しをもって学習ができるようになってきた。
- ・ 意図的に「人やもの」を取り入れたことで課題設定、追究が活性化した。
- ・ 課題追究2を意図的に入れることで、自分自身の考えを理由を確かにしなが、深めることができた。
- ・ 本年度も社会科がもつ固有な技能(地図指導など)を大切にしてきたが、来年度から一層意識して段階的に力をつける必要がある。
- ・ ものがあるから必ずしも追究する意欲が湧くのではなく、意欲が湧くための教具など実物の提示の仕方なども工夫する必要がある。

(3) 学習活動

- ・ 調査活動の時に、子どもが資料を見つけ、調べようとする意欲はもっている。これからは、課題の本質に近づけるような資料を選び出し、それを基に考えていけるようにしていきたい。
- ・ 対象としての人やものとのかかわりはよいが、これからは課題追究2を中心に、学び合いにおける人とのかかわりを大切にしたい。

(4) 子どもの姿

- ・ 自分の意見を経験や問題と関連のある資料に基づいて発言するようになってきた。
- ・ 時事問題など興味をもち、社会全体に関心が広がった子どもが見られるようになった。